

|           |                                  |        |          |
|-----------|----------------------------------|--------|----------|
| ■論文題目     | 盛岡市におけるバル街導入の可能性—他地域の事例をもとにした検討— |        |          |
| ■氏名(学籍番号) | 藤澤 遼(0412024306)                 |        |          |
| ■指導教員     | 山本 健                             | ■所属コース | 経済・経営コース |
| ■キーワード    | バル街                              | 地域資源   | 街歩き      |

## 1.本研究の背景と目的

人口減少・超高齢化社会において、地方都市では大規模な再開発（ハード事業）に頼らない「歩いて暮らせるまちづくり」への転換が急務となっている。盛岡市においても、「歩いて楽しめる街」としての需要がありながら、中心市街地の歩行者通行量の減少や市民の満足度の停滞が課題となっており、既存の地域資源を再編集するソフト事業の導入が求められている。本研究では、ソフト事業の先進事例である「バル街」に着目し、先行研究で空白となっていた「導入前段階」のプロセスを検討することを目的とした。調査方法については、文献調査に加え、2025年9月に開催された「第38回函館西部地区バル街」での参与観察、およびインタビュー調査を実施した。

## 2.先行研究

バル街に関する既存研究の多くは、既にイベントが定着した都市における集客メカニズムや参加者の行動変容、あるいは多面的な波及効果の検証といった「事後評価」に偏る傾向があった。これに対し本研究は、未開催地においていかに地域資源を活用し、新たな価値を創出するかという「導入前段階」の実践のプロセスに焦点を当てた点に独自性がある。

## 3.先行事例分析

先行事例である「函館西部地区バル街」の分析を通じ、持続可能な運営を支える諸要素を整理した。仕組みとしては、5枚綴りのチケット制を採用し、参加者が各店で「ドリンクとピンチョー（一皿おつまみ）」を交換しながらハシゴを行うことで、必然的な街の回遊が創出される点が挙げられる。また、アナログマップは同じ地図を持つことで参加者の目印となり、見知らぬ人同士の会話を誘発する「街角の社交」の装置として機能している。さらに、余ったチケットを後日利用できる「あとバル」制度は、イベントを一過性で終わらせず、飲食店への日常的な再来店を促す動機付けとなっている。運営面では補助金に依存せず、チケット収入のみで運営しており、行政の縛りを受けない「自分たちが一番楽しむ」という自由な運営スタイルが、継続性とイベントの質を担保している。

## 4.盛岡市の現状と特色

盛岡市では人口減少の加速に加え、モータリゼーションの進展に伴う郊外型大型商業施設への顧客流出が顕著である。これにより中心市街地の歩行者通行量は平日・休日ともに減少傾向にあり、街全体の回遊性の低下は深刻な課題といえる。市民意識調査によれば、41.9パーセントが街の活性化を実感していない一方で、街の魅力の有無について「どちらともいえない」と回答する中間層が43.7パーセント存在しており、バル街のような新たな楽しみ方を提示することで、これらの層をポジティブな評価へと転換できる可能性は高い。盛岡市が有する地域資源は、市民生活に根ざした食や祝祭、そして歴史に裏打ちされた「技」と「知」が密接に結びついたものである。盛岡三大麺や個性豊かな地酒、コーヒーといった多層的な食文化に加え、さんさ踊りや秋まつりの山車といった熱狂的な伝統行事が街の熱量を支えている。さらに、南部鉄器などの伝統工芸や石川啄木、宮沢賢治といった先人たちの物語が都市空間に知的な情緒を添えており、バル街という仕組みは、これらの魅力を多角的に体験する絶好の機会に他ならない。

## 5.既存イベントとの比較分析

盛岡市における回遊型イベントの先行事例である盛岡お月見ハシゴ酒祭りは、平日の閑散期に大きな賑わ

いを創出する商業振興策として確立している。しかし、その回遊設計は指定された店舗を巡るラリー形式が主であり、参加者は受動的な消費に留まる傾向がある。一方、本研究が提案するバル街は、全ての店舗を参加者が自ら選ぶ完全自由選択制を採用し、自律的な街の探索を促す点に特徴がある。開催時間においても、夜間限定のお月見祭りに対し、バル街は昼から夜にかけて行われる。その上で、未消化チケットを後日利用できるあとバルの仕組みが再来店の動機付けを強化する。既存イベントが既成の繁華街での飲酒に特化しているのに対し、バル街は盛岡が誇る歴史的景観を舞台装置として活用し、歩くこと自体の豊かさを享受させる文化的価値を提供する。お月見祭りが築き上げた運営基盤や市民の参加意欲を尊重しつつ、バル街が持つ自律的な探索と歴史的景観の舞台化という思想を融合させることが有効であり、盛岡市においてバル街を導入することは、既存のイベントを否定するものではなく、異なるターゲットや目的を持つもう一つのイベントとして、街の多層的な魅力を引き出す役割を担うものといえる。

## 6. 具体的提言

盛岡におけるバル街開催のコンセプトは、当日の体験を通じて市民が「盛岡はやはり良い街だ」と再認識し、街への誇りを深め、その魅力を誰かに自慢したくなるような心理的状态を創出することにある。舞台設計においては、現代的な商業の賑わいと城下町の歴史的な情緒が、徒歩圏内の一本の動線上で接続されている点を最大限に活用する。具体的には、大通りの入り口に位置するクロステラス盛岡を受付とし、内丸を経て中ノ橋、紺屋町エリアに至る約 1.3 キロメートルのルートを回遊軸として設定する。このルート上には盛岡城跡の石垣や岩手銀行赤レンガ館などの歴史的建造物が集中的に配置されており、ニューヨーク・タイムズ紙に評価された「歩いて楽しめる街」としての景観資源を情緒的な体験を生み出す舞台装置として活用する。収支面では、導入初期に公的支援を活用して基盤を整えつつも、長期的にはチケット収入を主軸とした独立採算制へ移行し、行政の縛りを受けない自律的な運営体制の確立を提言する。また、参加者の体験を支える仕組みとして、紙のマップ、昼からの開催、あとバルを導入し、能動的な街歩きを促進する。

## 7. 本研究の意義と今後の課題

本研究の社会的意義は、ハードの再開発に頼らない都市のソフトな再構築モデルを提示した点にある。既存の資源を舞台として編集し直し、市民が主体的に歩く仕組みを構築することは、先行事例の分析に照らせば、一時的な賑わいを超えた多層的な波及効果をもたらすものと期待でき、内発的で持続可能な活気を生み出す基盤となる。学術的意義としては、事後評価に偏りがちな従来の研究に対し、未開催地での立ち上げを扱う導入前段階のプロセスを構築した点に独創性がある。これは、同様の課題を抱える他都市においても汎用可能な知見といえる。本研究の課題として挙げられるのは、バル街を単発の飲食イベントに留めず、盛岡市の将来的な都市政策や既存の市民活動といかに深く融合させていくかという点にある。多層的な効果を実証的に検証し、一過性の催しではなく都市の文化として定着させるための長期的展望の構築が求められる。バル街の本質は形式ではなく、地域に対する主催者の動機そのものにある。盛岡市という土地で「何のためにやるのか」という問いを共有し、街を再発見し続ける終わりのないプロセスこそが、盛岡を真に「誇りある街」へと変えていく道である。